

安芸先生から学んだ強震動地震学

入倉孝次郎

私は1984年の8月から1986年の1月まで、USCのKei Akiのもとで仕事をする機会を得た。日本にいたときは「卓抜した地震学者、安芸敬一教授」ということで「会ったら何を話したらいいのだろうか」と恐る恐るアメリカにやってきたが、実際に会ってみるとスタッフや学生はみな”Hi, Kei !”と喋って気さくに話しているのには驚いた。この文では、親しく”Kei”とすべきか、尊敬を込めて「安芸先生」とすべきか、迷うところもあるが、自分の気持ちに忠実に書くため後者とした。

安芸先生は1966年から1984年の18年間MITの地球物理学教室の教授をつとめ、1984年の9月からUSCの地質学教室（地球物理学グループ）の教授に転じた。私が安芸先生のところで仕事をしたい旨の手紙を送ったとき、安芸先生はMITの教授だったが、実際に私が安芸先生からの招聘を受けたときはUSCへの移動を決心した後だった。安芸先生はMITとUSCの両方のポストをもっていたので、どちらでも好きなほうを選んだらいいと言われたが、私は迷わずUSCに決めた。そのころ安芸先生は「なぜMITからUSCに移ったのですか」と人から聞かれることがよくあった。彼の答えは「私ははじめ地震の多い東京で地震の研究をしてきたが、『地震』を客観的にみる必要があると感じて地震の少ない米国東部のボストンに研究拠点を移した。しかしながら、そこで18年間『地震』の研究をしてみると、やはり地震活動の活発なところに住んで『地震』の研究をやらないと納得の行く研究ができないのではないかと思うようになり、西海岸のロスアンジェルスに移る決断をした」というものだった。この話が安芸先生の気持ちをよく表していることは、USCに移ったとき大学から提供された特別予算で地震計や伸縮計などの観測計器や地震探査装置を購入して観測的研究も始めたことから裏付けられる。

私が安芸先生の下で研究をしたいと強く思うようになったのは、先生の「強震動地震学」を提唱する論文(1982)を読んだことにある。それまで、京都大学防災研究所で「地震動」の研究をしこしこやっていた私にとって、その内容はまさに革命的なものであった。先生は「強震動地震学のゴールは、将来地震発生が予測される断層に震源断層を想定し、伝播経路の地下構造を考慮し、生成される地震動を正確に予測し、被害対策のための情報を提供することにある」と述べている。今から考えれば至極当たり前のことではあるが、その当時は、地震の研究者は自分達がやっていることは理学的研究で工学とは関係ないことをむしろ誇りとし、一方地震工学の研究者は地震研究者のやっていることは工学には役立たないと考えている、というような風潮の中での提言で、その斬新さは際だっていた。私が安芸先生から学んだもっとも重要なことは、「地震の研究は、ここまでは理学とか工学とか分けて考えることはできない」「真実を突き止めることができれば必ず社会に役立つ研究になる」などUSCの美しいキャンパスを散策しながら常日頃語ってくれたことにあると思う。そして安芸先生のこのような信念は先生の好きだった宮沢賢治の世界に通じるものであることが、先生が昨年自伝として書かれた「私の研究人生」を読んで理解できるようになった。

(京都大学副学長 入倉孝次郎)